



Oil-painting work -35

【うれしくなって】50号油絵

飛行場と村落のそばに、
数トンはあるかと思われる赤い石(赤毛を示すのか)を
頭に載せて立っている高さ10メートルほどのモアイがあります。
長耳、長鼻、くぼんだ目、ひき結んだ薄いくちびると、
異様に長い指を腰にあて島民を見守るように
青々とした海を背に立つ姿は、
夕陽が沈む西の空を指し示しているようです。



Oil-painting work -36

【いつかきた道】50号油絵

雨の日も風の日も、
巨大なモアイを浅瀬の海岸まで運んだ姿を思うと
たまらない気持ちにさせられるのです。
でも、夢中になれる時間は、かかわったものだけにしか
味わえない喜びであったかもしれない。
むきだした火山岩に、たたきつける雨音が、
ひよわな私の心を励ましてくれる
応援歌に聞こえてきたのです。



Oil-painting work -37

【家族】200号油絵

●イースター島の伝説の一つに、
西方からホツ・マツア王の命を受けて、
7人の息子がこの島に上陸したという話があります。
7つのモアイ(石像)は、
南西に島を横切り、西側を見下ろしたところに
唯一外敵から島を守るかのように、
海に向かって立っています。
私の家族にも、地球の裏側の素晴らしい世界を、
絵の世界で見せたいとの願いから制作。



Oil-painting work -38

【7人の息子たち】50号油絵

●唯一、西の海に向かって立つ7人のモアイ像だけは、1日の終わりの夕陽を見ることができる。山裾にそびえ立つ7人の息子たちは、まるで、ひそひそ話しをしているように見える。ラノ・ララクから、この山裾まで、どうやって運んだのか、という疑問が頭から離れない。太陽も月の力も、すべてが息子たちのものに思えてしまう。



Oil-painting work -39

【ひたすら時を待つ】50号油絵

●岩肌を叩き割り重ねた見張り小屋。
渡り鳥の季節、オロンゴの丘から見える小島に、
若者たちが先を競って、
島民の貴重なタンパク源である鳥の卵を採りにいく。
断崖から飛び込む姿は、あたかも鳥のようであっただろう。
後ろ向きでやっと大人一人が入れるこの中で、ひたすら時を待つ。
ワンチャンスに賭けたのは、
島民のタンパク源を求めただけなのか。
シーンと静まりかえる耳もとに、
眼下に碎け散る波音が
古代の壮絶なドラマを呼び戻すかのようにはね返ってくる。
思わず足もすくむ、この断崖絶壁から飛び降りた若者たちの
生死を賭けた鋭い叫び声のように聞こえたのは
私だけの錯覚だったのか、
いまでも不思議な体験なのである。



Oil-painting work -40

【大津波の驚異】50号油絵

●1960年のチリ大地震で生じた大津波で、
トンガ・リキの浅瀬の海岸に立っていた
10数体のモアイは、破損してしまった。
それぞれが、50トン近くもあるのに、
大自然の猛威は人間の想像を遥かに超えていたのです。
巨石人像の雄姿は見るも無惨な姿となって、
荒涼とした風景の中に横たわっています。
現在は、1994年に修復され、
かつての自然の摂理の中に眠るモアイの姿は見られません。



Oil-painting work -41

【美しい海の中に】50号油絵

- ホツ・マツア王の命を受けて7人の息子が上陸した地点は、島の北側に位置します。
この島で一番美しい湾の名を「アナケナ」という。
上陸した時が7月(アナケナ)だったからとのこと。
そして、この美しい湾から貴重なモアイの目(約40センチ)が発見された。
学者の間でも目の存在で意見が分かれ、
モアイをめぐる謎の一つになっていたのです。



Oil-painting work -42

【そのままおやすみください】50号油絵

●えぐられた山の形跡から、ラノ・ララクの山裾にはたくさんの巨石像が埋もれているといわれています。モアイ誕生の地は、このままそっとしておいてほしいものです。鼻先まで埋もれた巨大なモアイの横で、可憐に咲く花が、たくましく見えたのです。



Oil-painting work -43

【もうすぐ夜明け】50号油絵

満月に浮かぶようにして立つ巨大なモアイは、
島民を見守る心強い守護神のようだ。
天空を見つめる姿は、
真夜中にこっそり夜空の誰かと
交信しているのだろうか。
そんな思いにかられてモアイ像と一緒に
午前零時になっても眠れない。



Oil-painting work -44

【風のささやき】50 号油絵

●ラノ・ララクの火口湖には、
宇宙への発信基地や、
この島の多くの謎が秘められているといわれています。
トトラ葦は、その秘密を大切に守っているかのようです。
いったい、何百年の歳月の間、
そこに立ちつくしていたのでしょうか。



Oil-painting work -45

【夢をかける虹の橋】50号油絵

●雨があがり、ポイケの山にかかる虹の道が続く。
静寂だけが残された。無の瞬間。
樹木もないこの場所にいながら、
なんと美味しい空気なのだろう。
身も心も洗われるという感触につつまれ、
すがすがしい。



Oil-painting work -46

【ラノ・ララクへの道】50号油絵

●村落から正反対の草原に位置するラノ・ララク。
巨石像モアイ誕生の地です。
すべてのドラマは、この山を中心にして、
さまざまな形でつくられ、
展開していったと思われます。
ラノ・ララクの石切り場では、
彫刻家たちのたくましい歌声と、
岩を切り砕く音がこだましたといわれています。



Oil-painting work -47

【鳥人画タンガタ／マヌ PART-2】50 号油絵

●岩肌に刻まれたおびただしい鳥人画のレリーフを見るだけで、イースター島の巨石文化が、いかに長い歴史の遺産であるかを思い知らされるのです。強風が吹き抜けるオロンゴの丘はシーンと静まりかえり、眼下に碎け散る波音が古代を呼び戻すかのようにはね返ってくる。自然が作り出す音には、都会の不快な騒音はなく、不思議と落ち着くのです。



Oil-painting work -48

【雷ゴロゴロ】50号油絵

●耳の恐ろしく長い長耳族がすぐれた武器をかざして上陸し島を統治したが、先住の短耳族との間に激しい争いが相次いだ。勝者となった短耳族は、相手の祖先を傷つけるため、巨石像(モアイ)を引き倒す破壊戦争が始まったといわれています。いまでは、何もなかったかのように放牧された馬や牛がうれしそうに駆け回る。雷をともなった厚い雲がラノ・ララクの山を覆う。



Oil-painting work -49

【運搬人たちの叫び】50号油絵

●ラノ・ララクから数キロの地点。
運搬人たちの悔しさが聞こえるようだ、
小さいものでも数トン、
大きなものは数十トンにもなる巨大なモアイを、
かつては緑でおおわれていた大樹を伐採し、
その表皮はロープに、幹はコロとして使いながら・・・。
土は流失し、火山岩が露出する荒涼とした島になるほど
すさまじいドラマを繰り広げていたのです。
ものいわぬモアイの背を強風が吹き抜けていく。



Oil-painting work -50

【巨石人像に出会える道】50号油絵

●あっ、この道は前に来たことがあると直感した。
しかし、冷静に考えるとイースター島に来たのは初めてなのだ。
この草むらの向こうに、夢にまで見たモアイ像が迎えてくれるのだ！
心臓の高鳴りが激しくなり、吹き抜ける風音にも負けないうらい脈打っている
感動する、いまが、この瞬間が、幸せに思えるのです。
緊張と期待と喜び、ここにいることに感謝しながら・・・。
なま温かい風が、ドキドキする気持ちの高ぶりを落ち着けと言っているよう
だ。
成田を飛び立ち片道36時間のジェット飛行の果てに、
やっと辿りついたイースター島。
今日から、始まる一生のテーマとできるのかモアイとの出会い。



Oil-painting work -51

【守られている感覚】50号油絵

●1984年2月イースター島でのモアイ像との出会いは一瞬にして過去へのタイムスリップとなった島を取り囲む紺碧の海岸線を背にして屹立する一人のモアイ像に釘付けになった。創作の世界への職業選択を誰よりも気にかけていた父親の存在を強く感じたのです。モアイの表情が似ているというのではなくこの場所に立つモアイ像が父親の魂、やさしさを発信していたのです。時間が静止したモノクロの世界としたイースター島に油絵制作の100景に、どこから強い日差があふれる色彩表現の世界が生まれてくるか私自身が楽しみとしたきっかけの作品なのです。



Oil-painting work -52

【夢は大きな力】50 号油絵

●ラノララクの山裾に一人たたずむモアイ。
遥か彼方の水平線に向かって何をつぶやくのか
長い耳、長く高い鼻、大きく突き出たアゴ
首から下は、さらに10メートルも埋められている。
巨大な体、個性豊かな表情は、怖いというより
すべてを包み込んでくれる温かさを感じるのです。
突き刺すような強い日差しの中で悠然と立ちつくす姿に
心うたれるのです。